

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 渡辺 優

17世紀フランスのイエズス会士、J.-J.スュランは、ルーダンの悪魔憑き事件に巻き込まれた「悪魔に憑かれた払魔師」として知られてきたが、ミシェル・ド・セルトーの画期的研究を経て、その研究は新段階に入りつつある。本論文は、著者が二年余のフランス留学等により現代の研究水準をよく咀嚼した上で、独自の観点からのスュラン読解を試みた力作である。スュランの生涯と著作、研究史と現状、著者の研究の視座、方法等を明示した序章、それぞれ「定位」、「対比」、「探求」と題される三部からなる本論、論点を簡潔に語り直した結論を以て構成されている。

本論文が第一義的に企図するのは、スュランの著作群の精読によってそこに独自の宗教的境地と神秘思想を読み取っていくことであるが、著者の読解を導き特徴づけているのは、スュランが生きた17世紀中葉のフランス、より広くは近世西欧における信と知の根拠づけを巡る大規模な構造変化への関心である。第Ⅰ部「定位」でまず、この構造変化を、宗教的真理を含む真理主張の根拠が伝統や権威の受容から個人の経験・体験の水準に移行したこととして捉え、それが中世後期以降の神秘体験への関心の高まりにも見て取られることを示す(第1章)。しかしスュランにおいては、自身の激的な神秘体験よりも、同僚の神父への信頼や、宣教活動で接した民衆との交わりの地平が、「信仰の神秘主義」とも言える新たな境地に彼を導いたとの見解が提出される(第2章)。これが本論文全体のテーゼであり、第Ⅱ部「対比」では、スュランによる「信仰」の神秘主義的意味づけが、神秘主義を巡る当時の論争の中に位置づけられて鮮明化される。シェロンに代表される反神秘主義論者たちとの対比(第3章)と、スュランと同様に神秘主義の伝統を称揚するフェヌロンの「純粋な愛」の教説との根本的差異の摘出(第4章)である。第Ⅲ部「探求」は、スュラン自身の信仰の境地の内実とその宗教哲学的意義が、現代の哲学者・神学者の思索を参照しつつ探求される。絶対的真理の現前の出来事と解された神秘体験ではなく、その「不在」をこそ神秘の次元として確保するスュランの信仰の境地においては、他者への信頼を要件とする「証言」の言葉、またこの世の「時間」に新たな意義が見出され(第5章)、究極的真理の現前と不在の対立の彼方に新たな「平安」の境地が開かれることが、テキストに即して説得的に提示される(第7章)。

スュラン研究のみならず、従来の神秘主義研究全般の動向を一步前進させようとする意欲的な論文であり、それだけに著者の歴史理解やテキスト解釈については、いっそうの説明や精緻化を要するところがないではない。しかし、広い歴史的展望に基づく問題設定と該博な文献精査に基づいて、独自の近世神秘主義理解を提出し得た成果は大きく、審査委員会は本論文を博士(文学)の学位授与に相応しいものと判断する。